

「大阪編」

芸術文化を支える 大阪の「人」の力

川井郁子 ヴァイオリニスト／作曲家



かわい いくこ ヴァイオリニスト／作曲家
東京芸術大学卒、同大学院修了。大阪芸術大学（芸術学部）教授。ソリストとして活躍の他、TV「ミュージズの晚餐」（TX系）やラジオなどメディアでも活躍。「川井郁子 Mother Hand 基金」を設立、国連 UNHCR 協会評議員。08 年 NY カーネギーホール公演で米デビュー。今年アルバムデビュー 10 周年。10/7～11 世界的バレエダンサー、ファルフルジマトフとのかつてない音楽舞踏劇「COLD SLEEP」@新国立劇場、10/6 アルバム『REBORN』発売、11 月より全国ツアーを予定。
<http://www.ikukokawai.com/>

幼稚園の頃、家族旅行で初めて訪れた大阪は、ワクワクするような熱気に溢れていた。なにより街の人たちのテンポのいいお喋りが面白くて、楽しかった。通天閣など有名な観光スポットよりも、とにかく「人」。人のインパクトが強い。今、私は大阪の大学に月二回教えるに通っているが、その第一印象は変わっていない。

以前に比べると最近、街が洗練されてきた。中之島あたりなど特にそう。すぐ洗練されたものと庶民性、両極の相反するものがたくさん同居している。先端のファッションに身を包んだ美しい女性が、口を開くととても面白いとか。街人も意外性がいっぱい詰まっています、奥が深い。

全国各地でコンサートを開いているが、大阪のお客さまの

反応は群を抜いてダイレクト。「どう楽しませてくれるの」「っていう期待感が舞台上まで伝わってくる。演奏に対しても、周りの反応を気にせず、自分が良いと思うとすぐに拍手をしてくれるから、どの曲が好きかすぐわかりやすい。海外のコンサートではそういう反応も多いけど、日本ではお客さまのほうも緊張しているのか、反応が均一。終了後のサイン会などでお会いするまで、どの曲が良かったのか、どう感じてくれたのか、わからない。演奏中にわかる大阪では、私の気持ちも盛り上がる。奏者にとっては最高のお客さまだ。

オーケストラとの共演も大阪は、やりやすい。「みんなでの一つの音楽をつくろう」というノリだから、ヨソ者が力を試されてるようなプレッシャーを感じなくて済む。私は結構心配性だけど、大阪に住めば楽観的になれるかもしれない。人と人の垣根のなさが嬉しい。

ただ、残念ながら音楽をやっている者にとっては、東京の方が「場」が多く、活動しやすい。芸術文化を育むには、夢を持てる環境が大事。憧れの人の活躍を身近に見ることがで

きる環境——アーティストが仕事をしていける場がなければ、若手は育たない。

人が人をつくる。相手を楽しませるサービス精神が旺盛で、ちよっとお節介。会話が面白く、フランクな雰囲気の中なかで

エネルギーをもらえる街・大阪。遡れば江戸時代、大坂は人形浄瑠璃はじめ上方文化を花開かせた。文化を育む土壌として、「人」の力は今もある。次はアーティストが活躍できる「場」があれば、大阪はもっとと素敵な街になる。**躍**

